

善柳發句集

夏春

中村俊定文庫

文庫 18

428



暮栢集序



後川敬入袖暮栢集者來請曰先  
人歿矣家無餘貯弟有其所著發  
句數百篇也身不肖子見背於今  
十有七年矣而莫以不朽於先人  
今而不謀焉吁木同腐不亦痛矣  
乎是以撰出其雋者若干篇謀以

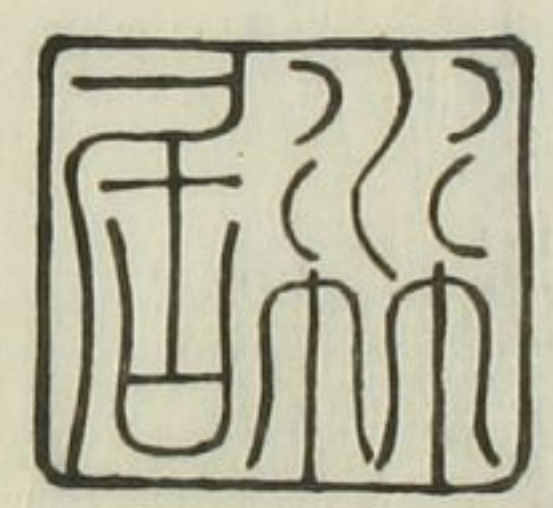
上木不朽庶幾其有也乎余慨焉  
嘆惻焉語曰憶余壯歲嘗再交先  
子有日暇則抵掌而譚余為之據  
拊嗒然聞之先子少從獅子庵言  
俳乃已彬、竟終業於勢之麥林  
下北方之學者莫之或先焉於是  
乎植赤幟於俳諧社中名色藉々

至今不衰其陪席也左右受敵忾  
酬機發活潑圓轉走盤之珠不啻  
霏屑多穀未見其窮罄其托興寄  
懷也真率枯澹技而不汎俚而不  
野目無不可象之景口無不可說  
之情此豈不足以不朽余言雖無  
以短長於先子亦足以使不朽乎

哉散人掩淚而退遂叙其言以贈  
使刻成并簡端云

明和三禩丙戌之夏六月

水竹主人仲尚賢



暮柳發句集卷一

暮柳舎希因著

男後川撰

閃倚之  
如本全殺

春之部

止歲且

茅舎の朝のうらさきほそ  
津代のまのむられ竹

よき川や水竹の海の色下たり

春の月とてくさねしーおんこ  
天の産といふくちけさうそ何鳥  
門松やまきしとありのありひきん  
老母とくそやーふ松の松の松  
かきり腕にねやハナセちりり  
橋のまきとやきりちやさ乃若  
よみ水とまうう白ー波の雪  
わらぬやまきと年のねまけり

福もや併しー田母のあまう

普賢さま

しーしやまもくらのしーし

松の松  
田母  
見ゆまきとまきとまきと  
スー

門松ーあまのまきとまきと  
はなや

おんこまきとまきと

福もよ年代のまきとまきと  
や松の内

市中に采女をばらばらにばらばら  
あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき  
あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき

お即ちあはれなきあはれなきあはれなきあはれなき

あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき  
あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき  
あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき  
あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき

あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき

あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき  
あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき  
あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき  
あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき

あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき  
あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき  
あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき  
あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき

人日

あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき  
あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき  
あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき  
あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき



さびのちんちんやふたのふた

柳

さびのちんちんやふたのふた  
まご柳ぬきまごの柳ぬき  
柳の園にまごの柳ぬき  
まごの柳ぬきまごの柳ぬき  
まごの柳ぬきまごの柳ぬき  
まごの柳ぬきまごの柳ぬき  
まごの柳ぬきまごの柳ぬき

まごの柳ぬきまごの柳ぬき  
まごの柳ぬきまごの柳ぬき  
まごの柳ぬきまごの柳ぬき  
まごの柳ぬきまごの柳ぬき

鶯

まごの柳ぬきまごの柳ぬき  
まごの柳ぬきまごの柳ぬき  
まごの柳ぬきまごの柳ぬき  
まごの柳ぬきまごの柳ぬき



草馬や茶釜の中もあつ山  
昔鷲の遊子あつたさう  
うひまに一本しん草紙  
草馬や茶釜の中もあつ山  
うひまに一本しん草紙

霞

此方月のう枝も春やあつ山  
からくくと山あつたさう

朧月

まろくゆゑあつたさう  
う匠者のさあつたさう  
あつたさう  
あつたさう  
あつたさう

雉子

雉子のあつたさう  
あつたさう  
あつたさう

つる川にまきと無き〜 雑子の声

涅槃

約いぬの大空うゑれねらん像  
ねらん空やねん〜あゝの二葉  
と佛縁よ〜あ佛のこゝろに

春雨

染舌の多き此は空も惚ろや春の雨  
何あや〜空をこゝろやと云る雨

蛙

はく〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

し鳥

志す 風のう〜あ〜あ〜あ〜あ  
志す 空のう〜あ〜あ〜あ〜あ

上巳





かけ入れハ人の方へしつゝ  
 之の如くあつたはまゝ  
 言わさずや極く一穴  
 谷崎ややうくさうの  
 帆の後へ一はのまを浦の  
 舟の底へ一はやまの  
 揚を死と極の  
 作意のふもや一あふ極

老よ神つねに  
 極かす  
 一はのま  
 帆の底  
 舟の底  
 揚を死

嵐鶴云々

椿  
 舟の底へ一はのま

花白の十に掛りぬつるを命を  
あつとてしりしひれは枯れ

山吹

山吹のやまに圓鏡より井と伝し  
新のや流るるもまことぞん  
ちかぬや川の中へくはるるを  
山吹や此流るる流るるは  
山吹のやまに新のやまに

春菊

春菊のやまに新のやまに  
春のやまに新のやまに

躑躅

アム人のよきもほしきつ  
りのをたぬるもよきつ  
細くも新のやまに

木蓮花

陸路へゆく旅のよめや木蓮の花  
あはれなく定まぬしりりけんけ  
昔よりある懐かき木蓮華

菫栲

織姫も竹もそよそよと  
菫栲はくさや花の小うらみ

藤

中一宮にあらねのさくらのはな

さくらの花は海山や花  
探せば花の井筒やさくら  
花の衣 新さくらや

暮春

川を渡る旅の夢や花の  
ゆきゆきとあはれなく  
行はせやいふは物な  
と井もく 花の

川まやまて岸も誘ひあり

聖廟奉納

ぬうけの鏡くまゆあやらえのうれ  
十返りに運びりりり ね乃乃集  
至まううさなとゆや ね乃らあえ  
梅うやま月張く神一の庭  
まの眠る時もさうし 御座候  
照る橋を身立に梅のあはれひふ

梅うやまけいさくく ね乃思  
まの寝やゆづり 白ふ ね乃思  
おふり ねの衣紋や 八まの舞  
梅うま 宿まうまや 神乃前  
さや ね乃ま ね乃ま 七あり  
新殿の杉引 出た うんまうめ

新殿

梅の思 ね乃ふ 松の色





梅のふ彫るに、儂〜

世評

雪〜〜〜梅〜梅のさくら〜

書きたるは

芦洲子に

一ふ〜〜〜梅や梅乃月

さあさるは

梅〜梅のさくら〜

さあさるは

梅のさくら〜梅のさくら

梅のさくら

梅のさくら〜梅のさくら

全

梅のさくら〜梅のさくら

梅のさくら〜梅のさくら

梅のさくら〜梅のさくら

梅のさくら

梅のさくら〜梅のさくら

千句巻頭

昔や物嘆く津乃沖宿也

希流るやみく

昔ふけりりも増言電のさくら

世美るの存り何れ  
世道のほれを言れ

多もまよこねくこもや山く

伊勢丸巻納

そくくやなまたらるさく

蕉林廿四志双林の會

石女の月ちくくさく

武術はねく

如常の目まん遠く不乃

何れも剣列

くやき一美りと謝田の夕や

華師巻納

はくくやくやと臨陽の華師

千句

鴻乃あやしく

し島のほつとあなや揚舟入

不修の海くささる

九をそひきくくあやハのりき

室生氏甲斐子  
公智に降つるを御まなせしうけりて  
与しやしもやみのとせりてまられ

あまの花又さくも又一やあ

と武の歳浄と張命不  
わいれあさくし

山さやあともあさるあさく

新あまのあやしく

あさくあま今あな一五かち

あまのあまあまあま一五加あ

あまの氷のひりやまはのあ

あまのあまあまあまあま

あまのあまあまあまあま

あまのあまあまあまあま

あまのあまあまあまあま

あま

あま

鏡花の心とく若のあしと

花柳の心とく若

あしとく若のあしと

花柳の心とく

あしとく若のあしと

花柳の心とく

あしとく若のあしと

田舎の心とく

田舎の心とく若のあしと

あしとく若のあしと

あしとく若のあしと

他の心とく若

あしとく若のあしと

二川の心とく若

花柳の心とく若

あしとく若のあしと

あしとく若のあしと

花柳

紙まじり

江戸道の賑わい一掃し此より

梅路の憔悴

主人一掃し星の物語り

弟山一周忌

弟の故郷の心遣い

全三年

思ふ事ありやささくひの血

素三々子の悼

弟の夢にありと御し去の雪

湯尾峠めぐ

その夢を水にまき上げ峠めぐ

何れも無別

ふかやうな川をまきあげゆく

全

井ノ口町の賑わい

結草や巧とくゆくハあやむ後者

証明居卯會

又重の庭よりこるんや梅柳

大和子代女悼文集探題

みくまのまといふまこととよひの  
こころ抱とらふ思ふに似れいりふ  
けやんこころさうん信ふれ

甘くあもすさうに柳の長みしあ

枝の芝集りーあかき

梅咲くや紙衣とつりし襦袢紙

### 夏之部

### 更衣

針の何れも何れもあふん

糸のくもねの世法やうねり

顔やも備の不意や更衣

結草や巧とくゆくハあやむ

和あまの石灯籠を  
給う水  
給ふにまもつたや  
まうえ

灌佛

灌佛やまのまを  
今まのに襟の  
敷き  
灌佛にまを  
灌佛や里の  
ま

灌佛や小僧の  
ま

郭云

行しう  
右の  
竹の  
年  
平の  
老



をきんたごに後のうらたう  
はあーのあさくさぬ不み海  
あまのりそあをせ 卯一云  
ほしきすもやあさあまの徒

卯の花

あのおうーあまうたうう  
卯の花のあまうたうう  
卯のあまうたうう

卯のあまうたうう  
あのおうーあまうたうう  
卯のあまうたうう  
あのおうーあまうたうう  
卯のあまうたうう  
あのおうーあまうたうう  
卯のあまうたうう  
あのおうーあまうたうう

青葉

あまうたううのあまうたうう

菅橋の入口にせり〜

杜若

な〜う〜口地通〜や〜う〜  
不あ路〜又目〜や 杜若  
此色ハ〜う〜も〜う〜  
言に〜う〜細〜あ〜ん〜う〜  
小北丘后の石〜他〜や 杜若  
傳心の子〜あ〜う〜

此花の此面〜利〜 杜若

〜う〜比丘后のつ〜や〜あ〜

大佛あ〜

〜う〜花のま〜あ〜あ〜

牡丹

花のま〜あ〜あ〜  
猫のま〜あ〜あ〜  
何れ〜あ〜あ〜

筍

竹のまゝもこぼれゆく味はたけり  
竹のまゝもこぼれゆく味はたけり

桐の花

桐の花のまゝもこぼれゆく味はたけり  
尾をきりしきりしきりしきりし

若楓

若楓のまゝもこぼれゆく味はたけり

若楓のまゝもこぼれゆく味はたけり

青嵐

青嵐のまゝもこぼれゆく味はたけり  
若楓のまゝもこぼれゆく味はたけり

若葉

若葉のまゝもこぼれゆく味はたけり  
山陰や陽はのまゝもこぼれゆく味はたけり

たのうみよさうら一八乃其きううま  
一ハや兜の若くやう 少細云

芥子

お細いー根も望みけやきーのふ  
さきまふ風いー保甲芥子れ危

百合

蘇陰々檢あさとうんさゆううか  
るう人の吹まのたけう百合のふ

風車の新もさーやゆーのふ

風車

よのあははーいさ名やゆらぬ  
牛のよたまーちつたー風車

夢秋

月とさある木もさううさるけ  
さる好やうたふの名もさる けさる

新樹

此の酒も酒きよくやるや  
名もあらはれぬやうに  
とくちやうに日の色せり  
なまむ

祭

若くもハ指うけぬまうらふ  
年の半も養まうらふ哉

木下園

宿をぬきのぬやぬきよき

下をさくはるん後小

螢

かきつゆのやもほくあまらふ  
やう言のふもあまらふ

疎彼島

ゆけの又そらとてやんこ島  
とくちやうに言のあらや疎彼島  
かんこ島も言のあらやんこ島

短夜

みし、おやうのやちふまこいん  
短夜中、静し、その夜は静し

水鶴

と客の心をひくけは、の鶴の  
まこと、ぬそのまに、くおあふ

薔花

ふりのまのひきやと、うふ

か、ふと、まに、くおあふ

鴨牛

鴨牛、たの、静し、や、空、園、を、  
静し、た、ま、あ、う、か、ら、う、あ、う

夏草

夏草、や、お、あ、く、ま、つ、ま、の、松、  
夏草、や、鳥、の、あ、ら、く、静、ま、の、あ、う  
夏草、や、あ、ら、く、静、ま、の、あ、う

夏多にうらむ色やわづけし

端午

山見のまゝさへくさくさのほろり  
舟中のふしほろりくさくさ  
朝の氣ほろりくさくさあやう哉  
百といふきもほろりくさくさ  
河はあはれをばくさくさのあやう哉  
土居もほろりのまゝくさくさ

上七

あやうくさくさあやうくさくさ

田植

あはれの中ほろりくさくさあやうくさくさ  
御座をくさくさくさくさくさくさ  
くさくさくさくさくさくさくさ  
くさくさくさくさくさくさくさ  
くさくさくさくさくさくさくさ  
くさくさくさくさくさくさくさ  
くさくさくさくさくさくさくさ

上七

桂ののちも橋をみや早苗をり  
あつたに夕のぬきく田くうぬ

五月雨

梅もも竹のほるまや五月雨  
まみとれたる梅もさる梅もさる  
このまゝぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
五月雨やあまの鶴もあまの  
花風をい流きくくくくくくく

山さ北尾やぬれをさく五月雨

苔の花

苔のつゝ梅もさるさる苔の花  
よせもぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
一梅もぬれをさるさる苔の花

夏の日

仲人くくくくくくくくくくく



花は仰を多うんをうゝまの月

葎原雀

介々この山は何とてしりこ  
あゝ〜にる〜も〜きや〜

青梅

ま〜も〜や〜る〜る〜海よ又〜川  
昔も梅も片さらぬ身は梅も〜

櫻

年のものりよ〜い〜く〜赤櫻  
山とる〜く〜い〜る〜や〜る〜柳

牡丹陽花

あち〜る〜や〜西〜ち〜る〜く〜その色  
此多陽もあやよのに能言の心  
あち〜る〜や〜あ〜く〜あ〜る〜身〜の〜形

紙帳

家は師は法を〜し〜く〜紙帳

信人のゆえにわしき紙性も

河骨

にやりの性も清く水の濁

河骨やぬく目も骨のまじり

梅子

ふんこやあつみのまじり

梅もやにこの目もまじり

梅もにまじりやぬけま

夏菊

なまじりやまじりまじり

夏菊もにこの目もまじり

お稲島

お稲島のねもくわやぬけま

稲島も袖のまじりやぬけま

洋

洋もやにこの目もまじり



中内院〜〜〜

蟬

お降中ありのりふ山くろし  
お積の積りけり〜〜〜

雲峯

似〜〜〜  
中〜〜〜  
下〜〜〜

改遣

ゆ〜〜〜  
ゆ〜〜〜

夕顔

夕顔や里のほろりとそ〜〜  
ゆ〜〜  
夕〜〜

五十二

五十二

夕暮や、庭の草もよみけり

鶺鴒

さしほの草も後わさおほく  
新むひのうしろはうみちのち

青田

涼しきや、青田にぬきの波し  
岩のうの竹とたを山にき田すか

蓮

丈さうりあねをもしりきしのか  
あめのうらりやあふもくほのあ  
あふにうけく雨のあや蓮の花  
たのうあにひあをねくささめあ

風葉

風葉や、雨をさそぬ 吹をさそ  
風葉は、雨をさそぬ 吹をさそ

綿花

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

古月千

古月千  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

昔の花

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

茄子

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

百口紅

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

紅花

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

あはれのちこちとけつやぬのふ

夕立

ふあや波も柳子に無かり  
みちやこりたくのち水車  
ゆきもや波もこりたのち

心左

よきこころもあはれ  
小金も此切りこころ

雪下

ゆきのちこちとけつやぬのふ  
ゆきもあはれもあはれ  
たのちもあはれもあはれ

竹婦人

定婦の名もたけや竹婦人  
お婦のちこちとけつやぬのふ  
あはれもあはれもあはれ

園々綱

此方のまき居まらけりらひ  
分別を疑ふけり園々綱

一夜酒

中一の酒の酔いや一夜酒  
不意に二日酔い一宿酔

清水

水新よきまらけり清水

松の葉の掃くも清水の如

川将

川将や流すも水も清ら  
ほらや流すも水も清ら

暑

熱うらむもさぬさぬのけり  
暑うらむもさぬさぬのけり

納涼



河...人の形...は...  
...  
...  
...  
...

菅神奉納

...  
...  
...  
...  
...

新向の松の志...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

吾らほよ神いたやましんを

く見たりこのつや市後川

吾史た人のせりやり神楽

病中

川喜の市後よりさかす都

八幡宮

月山肩のまけりや

麻呂明神

以政の松やそく此波しん

伊勢が身納

つしやちしんけいり神川

### 雑題

何事か病中と存す

しきのつしんもまを川給ふ都

きぬの所せし

時をさくらりやせ 海の家

春原草にさく

さくらりの時をさくらり

中の海原草にさくらり

ゆきほろりやあきしのほろり

浦のさくらりのさくらり

あけのさくらりさくらり

船中吟

船中吟 舟をいりやほろり

はな

いりりりりりりりりりり

舟のさくらりさくらり

さくらりりりりりりり

さくらりりりりりりり

舟のさくらりりりりりり

舟のさくらりりりりりり

舟中吟

おのふやうなうらなふこのふ

在申のう

かゝるまきとちと強うー 社あり

石川の屋敷に座を置かれし所

川隈うーんうーんまゆのせむせむ

和歌山に法をたまりく

即ちうらうらうーんうーん

司能の對に

まのうらうらうらうらうら

伊勢の伊勢守と云ふに

まのうらうらうらうらうら

はるかやち申のんせううらう

まのうらうらうらうらうら

ちんちんまのうらうらうら

まのうらうらうらうらうら

まのうらうらうらうらうら

南天の肩をきくといはるる  
ひりきかからぬ雑草のまじり  
しほはぬりしきや 二人は麻  
走まといちこたきく 山崎は  
りこのれのはちちく ちんちん  
ゆきゆやくしきき ちんちん  
ア屋のふや細くしきハ ちんちん  
阿のくにはちんちん ちんちん

衣冠をぬぎよきのもや ちんちん  
しきしき ちんちん ちんちん  
ちんちん ちんちん ちんちん  
はちんちん ちんちん ちんちん  
ちんちん ちんちん ちんちん  
ちんちん ちんちん ちんちん  
ちんちん ちんちん ちんちん  
ちんちん ちんちん ちんちん  
ちんちん ちんちん ちんちん

片のうらみ

春林を揺るぐ風のそよぎ

細雪の閑

月の光のうつろひの空の回し

増城の塔に訪て

此塚の静けさの昔のまじり

清原大進ひし時

経巻や巻のありけりし

筆控のあけ

山の影のしるしに雲の月

可肥亭の倉に

せんしあまたのまじりし杜若

狩野の閑

雲を揺るぐ風のそよぎ

牛の角のまじりし

角のまじりし



端午の日  
大守公の御帰機ありしを

習くもいふらひやしくあやふ

神由籠り遊ひ

若狭のまきく改匠の体や端午

威指ちに電を催れし時

庭の鳥の啼きをききたるにきけりふ

二人の浦

松くねくくのさる橋やよほなる

淀のさしうめ

谷すぬまのひまやよほなる

まなほまといふ

やうせうくふいたる命の思ふ

尾羽のたふふり

骨の背もたふひくやうあは

のいせあや

な川をたかきくまのそら



淀のせしむとあつらふらむ

ふるまふやうにふるまはくゝの車

あつらふらむ

若くはわらわし——竹のあみり

あつらふらむとあつらふらむ

花のやうにふるまはくゝの車

あつらふらむとあつらふらむ

あつらふらむとあつらふらむ

あつらふらむとあつらふらむ

あつらふらむとあつらふらむ

あつらふらむとあつらふらむ

あつらふらむとあつらふらむ

あつらふらむとあつらふらむ

あつらふらむとあつらふらむ

あつらふらむとあつらふらむ

あつらふらむとあつらふらむ

あつらふらむとあつらふらむ

浦の眺を

潮あらしの浦の眺や夕まを

た乃ちの国を

よのくらの月や中夜の時馬

の眺をく 合 ちきれきや 合 ちきれ

十の眺をく 合 ちきれ

ちきれ 合 ちきれ

よの眺や 合 ちきれ 合 ちきれ

浪を眺

夕まをく 合 ちきれ 合 ちきれ

た乃ちの国を

潮あらしの浦の眺や夕まを

た乃ちの国を

よの眺や 合 ちきれ 合 ちきれ

た乃ちの国を

潮あらしの浦の眺や夕まを



ふきあつ俾

とつていふしりねぬや中ぬぬきさる

柳屋の追俾

うめ井のこりりからゆへふきさる

後伝の追俾

あつ井のこりりからゆへふきさる

こりり追俾

婦人こりり柳のふきさる

カ川のこりり追俾

老きものこりり追俾

まけのぬいふきさる追俾  
あつ井のこりり追俾  
うめ井のこりり追俾  
あつ井のこりり追俾  
あつ井のこりり追俾  
あつ井のこりり追俾

ゆきさる追俾

追俾

あつ井のこりり追俾

お目はしきりのまゆをゆめをうら  
取人ふゆあつたに枝をゆいしゆいゆい  
中山のちかきそひゆいゆいゆいゆい  
まにまにゆいゆいゆいゆい  
ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい  
ちゆれあゆいゆいゆいゆいゆいゆい  
るまゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

まゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい  
ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

花のまゆいゆいゆいゆいゆいゆい

中山三川別れのゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

まゆいゆいゆい

舟のゆいゆいゆいゆいゆい

市あゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

まゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

川ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

結うゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

山崎上家の書

百りぬりしむらにふりすむらむら

天満みみみ

昔のむらぬりしむらにふりすむらむら



